

対象	評価項目 (今年度の重点項目)	評価担当	具体目標	評価方法と評価基準	主な取り組み
総合評価 (前表に掲載)					
社会を 生き抜く (生)	1 自立の基礎 を培う	○古屋 佐藤 望月 深澤	●目標をもって学校生活を 送り、振り返りにより自己の成長 や新たな目標に気づく子どもの 育成 ●基本的な生活習慣を身に 付けた子どもの育成 ●自分の命を守ることができる 子どもの育成 ●みんなのために働くことの できる子どもの育成	○学校評価の児童アンケート「あなたは、目標をもって学校生活を送っていますか。」の項目に対し、「そう思う」と回答する児童を70%以上にする。 ○ノーテレビ・ノーゲームの取り組みを継続し、2時間以上になってしまいう児童について、20%未満を目指す。 ○交通ルールや自転車のヘルメット着用状況についてのアンケート調査を行い、ヘルメットについては所有率を昨年度に引き続き90%以上への向上を、また、着用率は90%以上への向上を目指す。 ○学校評価の児童アンケートを活用する。 <掃除> ・「あなたは、校内をきれいにしようとして取り組んでいますか。」の項目に対し、「そう思う」「ややそう思う」の肯定的評価をする児童の割合を98%以上にする。 <学級での当番・係活動や委員会活動> ・「あなたはクラスのために当番活動や係活動に取り組むことができましたか。」の項目に対し、肯定的評価をする児童の割合を95%以上にする。 ・「委員会活動は、充実した活動になっていると思いますか。」の項目に対し肯定的評価をする児童の割合を95%以上にする。	○帰りの会や授業の終末に1週間に1回以上、時間を決めてつなげる日記を書く。自学の内容として紹介するとともに、ノートに日記を書く視点を貼らせる。 内容例①授業や学校生活で感じたこと、気づいたこと(1日のふり返り)②自分が成長したなどと思ったこと ③困っていることや悩んでいること ④本や新聞やテレビなどを見て感動したこと、疑問に思ったこと ⑤登下校中に気づいたこと ⑥インタビューして分かったこと ⑦行事に向けて、反省など ○毎月ノーネット・ノーゲームの取り組みを継続し、お便りやブログなどによる保護者への啓発や掲示物による児童への啓発に取り組んでいく。 ○掲示物や映像資料などを活用して、交通安全に対する意識を高める。アンケート調査を年に2回行い、実態の推移を提示する。 <掃除> 児童会活動とともに取り組む。児童会の取組のSTSZ(S:静かに、T:丁寧に、S:隅々まで、Z:時間を守る)に合わせた指導を行う。年度当初の職員会議で掃除のやり方を確認する。道徳の勤労・公共の価値項目で清掃についても取り上げる。 <学級での当番・係活動や委員会活動> ・すべての学級で掃除や給食当番の田富スタンダードに沿った指導を行う。 ・学級の係活動や委員会活動では、最初に目的を明示し、児童がどんな活動を何のためにするのかしっかりと話し合いを行うことで、活動の必要性を自分のものとして捉えさせる。また、学期ごとにしっかりと反省をし改善に
確かな 学力 (生)	2 聞いて考 え、語り合 う子 育てる	○アキ レオ ス 谷口	●話している人を見て、考 えながら最後まで聞くことが できる子どもの育成 ●聞いて考えたことを語り合 い、学びを広げたり深めたり することができる子どもの育成	○2学期終了時までに、90%以上の児童のあゆみの評価が○◎になるようにする。 ○学校評価の児童アンケート「あなたは、授業中、友達の話聞いて自分の考えをよりよくすることができていますか。」の項目に対し、90%以上の児童が「そう思う」と答えられるようにする。	・聞き方のルールを再編集し、各クラスに配布する。そして、児童が常に意識して話を聞けるようにする。 ・ホワイトボードを使って、グループで話し合ったことをまとめ、発表する活動を行う。 ・授業中の担任は、児童の発言をつなぐ役割を果たす。 ・繋げる日記ややってみるじゃんノートの記述を話し合いの材料として活用する。 ・授業の終わりに振り返りの時間を設けることにより、友だちの考えの良さや自分の学びを自覚させる。
	3 読む子 育てる	○武井 青柳	●本が好きなお子 育てる ●音読したり暗唱 したりする ことを楽しむ子 育てる	○一昨年より目標を、うちどくカレンダーに半分以上○がつく児童を、学級60%以上にするとし一昨年は達成できたが昨年は、全校平均が53%で目標は達成できなかった。今年度も目標継続で、各学級60%にする。 ○好きな詩や物語の一節を暗唱できる児童を、各学級85%以上にする。	・図書委員会の活動を通して、読書の楽しさを伝えたり、多読を奨励する。 ・うちどくカレンダーの取り組みを継続して、子どもの読書生活に対する保護者の関心を高める。 ・うちどくカレンダーに保護者と担任チェック欄を設け、一週間に一度ほどのペースで確認し、声かけをする。 ・うちどくカレンダーの達成率をクラス毎集計し、達成したクラスの担任の先生にどのように取り組んでいるのか全体で共有できるようにする。うちどくカレンダーへのコメント、保護者のおすすめ本紹介など保護者を巻き込んだ企画を考える。 ・音読カードを活用して家庭でも音読に取り組ませ、音読への意欲と技能の向上を目指す。 ・読み聞かせやリズムのよい名詩名文を声に出して読む活動を、授業や朝活の時間に組み込む。 ・暗唱カードを活用して家庭でも暗唱に取り組ませ、暗唱への意欲向上を目指す。各学期ごとに一つ以上は暗唱できるようにしていく。全校集会など全校で集まるときに発表し、取り組みの活性化を図る。 ・図書委員会を中心に、読書週間などを活用して、全校に伝えたい詩や物語の一節を紹介する。
	4 確かな 学力を 支える授 業づくり	○前野 高野 古屋	●毎時間ごとのめあ ての達成 に向けて、自ら 問いをもち、 仲間とともに 学び合うこと ができる授 業を創造する。	○学校評価の児童アンケート「勉強する力が伸びたなあ」の項目に対し、「そう思う」「ややそう思う」(肯定的回答)の割合を、90%以上にする。	○各種学力検査の分析と支援が必要な児童の把握により、共通意識をもち、組織として支援を行う。 ○田富スタンダードに沿った授業の実施。特に授業づくりの際には、個別最適な学びの視点に立った、課題の解決方法を自分で選択できる授業を心がける。児童が、自ら進んで課題解決に取り組める工夫をしていく。 ○他教員の一人一実践の授業の参観を通して、互いに学び合い、授業改善に生かす。 ○校内研究のテーマ「自ら問いをもち、仲間と共に学び合う子どもの育成」の実現に向け、一人一実践に取り組む。
	5 自ら学 ぶ子 育てる	鷹野 内藤 宮川	●進んで家庭学 習に取り組 む子 育てる	・2学期の『家庭学習力のようす』において、家庭学習の学年目標時間を「低学年は毎日30分以上」「中学年は毎日45分以上」「高学年は毎日60分以上」学習していると回答する児童を85%以上にする。(昨年度全校平均83.1%、低学年86.8%、高学年79.5%) ・2学期末の「やってみるじゃんノート」が3冊目になっている児童を80%以上にする。[1年生は2冊目][昨年度全校平均56.7%、低学年76.5%、高学年43.7%]	○「家庭学習力のようす」カードを用いて、毎学期、自身の家庭学習についての振り返りを行い、保護者とも共有できるようにする。 ○「家庭学習力のようす」カードを用いて、毎学期、「やってみるじゃんノート」への取り組み目標冊数を決め、学期末には取り組みに対する振り返りができるようにする。 ○1学期、2学期末の個別懇談で、家庭学習の大切さや、取り組み時間、取り組み内容等の話をする。 ○各学年の工夫で、意欲的な学習内容のノートを紹介する機会を設定する。(教室や廊下の壁面掲示、学活として、上級生のノートの紹介など)
	6 心の居 場所と 支え合 う学 校生 活	○木内 河野 深澤 望月	●安心して学 校生活を 送り、 気持ちよく 活動できる 学校作り と支援体制 の確立。	・学校評価項目の「学校が楽しいか」において、否定的な回答をする子の割合を5%未満にする。(昨年度3.4%) ・「何かあったとき、先生方に話しているか」において、肯定的な回答をする児童を90%以上にする。(昨年度88.6%)	・「学校生活は楽しいか」のアンケートの分析と、早期対応・解決、ならびにQUの分析と対応。(学年で取り組む) ・FT、朝活などでじっくり児童と話す時間を確保し、否定的に考える児童に寄り添い相談できる関係づくりをすると共に、解決策を考える。 ・道徳や学級の時間を通して、相手を傷つけない言葉づかいを考えたり、相手を気遣う心や態度を育てたりできるよう、学級で取り組みを進める。 ・児童に関する情報を共有し、多角的な視点から、児童を見とれるようにする。
豊かな 心 (命)	7 地域と つなが るあ いさ つ の活 動	○鈴木 橋爪	●学校・家庭・地 域で、あ いさつが できる子 育てる	○どの児童も、見守り隊の方や、来校者の方に気持ちの良いあいさつをする姿が見られるようにする。	・全校であいさつ活動に取り組む。あいさつビンゴやあいさつ名人などの児童会活動を通してあいさつへの意識を高める。また、学校だけでなく、地域や家庭でのあいさつの重要性についても考える機会を設ける。 ・年間を通して、自分のあいさつを振り返る機会を定期的に設ける。 ・地区集会や集団下校の時に、地域の方へのあいさつの仕方を確認して、登下校中も地域の方や旗振りをしてきている保護者の方に積極的にあいさつをするように促す。
	8 共生の 教育	○清水 中澤 落合	●多様な他者 を知り、尊 重し、折 り合いを つけなが ら目標 に向かっ て共に学 び共に 活動で きる子 育てる	○日本語が話せない外国にルーツがある児童に優しく接したり、日系人についての理解を深めたりしながら、相手の立場を考慮するようにし、国際人としての資質を高め、誰とでも仲良く協力して活動できるようにする。 ○学校評価調査の児童の項目の「誰とでも仲良く協力して活動していますか」の項目に、4・3(そう思う・ややそう思う)と答える児童の割合を90%以上にする。	○フレンドシップ委員会の活動を通して世界の国のあいさつ、衣装、文化などに親しみをもてるように働きかける。 ・ポルトガル語、スペイン語、タガログ語、タイ語、トルコ語、マレー語のあいさつカードを各クラスに配布し、朝の会であいさつをするように働きかける。 ・校内(階段などに)簡単な挨拶を掲示し、多文化共生の感覚を養う。 ・民族衣装、文化、日系人理解などについてクイズを取り入れたフレンドシップ集会を行う。 ○校内支援委員会で確認された児童だけでなく、終礼や職員会議の知ってもらい子で挙がってきた児童について、指導・支援の共通理解を職員全体で図り、指導・支援の見直しを必要に応じて行う。
健やか な体 (命)	9 体力向 上	○向山 齊藤	運動遊びを通 して、跳 力の運 動能力を 高め、健 やかな 心と体 で日々 生活を送 れる子 ども	・運動遊びを通して、跳力の運動能力を高め、立ち幅跳び(6月・1月測定)で全国平均記録以上となる児童を70%以上を目標とする。 昨年度の全国平均達成率 男子:52% 女子:45%	○体育の授業の中に、跳の動きを取り入れた運動を行う。 ○遊びの日常化を図るために、各学年にボール等の遊び道具を配布する。 ○体育委員会を中心とした企画、実施する集会で、全校で「エイトマン」にチャレンジする。 ○体育委員会の企画で、「なわとび遊び」の集会を開き、縄跳びを活用した遊び方を全校に知らせ、遊びの日常化を図る。
	10 食育の 推進	○廣瀬 末木 小林	●食に対する 関心をもち、 健康な体 作り努 める子 育てる	○一人当たりの残 菜量を年 間平均 30g以下 にする。	・教育活動全体を通して食育の視点を生かした指導を行う。また、体の栄養となるため苦手な食べ物があっても、一口は食べるように学級担任からも児童へ声かけを行う。 ・手作り弁当の日を通して食に対する関心と実践力を養う。 ・給食の時間を利用して、栄養教諭による給食指導を行う。 ・月別に提供される食育の資料を活用し、目標が達成できるように各学級で指導する。 ・5月～7月の残菜調べを行い、結果を児童に提示する。
信頼さ れる 学校 (信)	11 積極 的な情 報発信 と連 携	○橋爪 内藤 前野 望月 校長	●学校生活 に対して積 極性を持 って生活 できる子 ども	・保護者への学校評価アンケートで、「学校からの情報発信や連携がよく図られている」と教職員は、あなたのお子さんのことをよく理解していると思いませんか」の肯定的な評価を95%以上を目指す。また、ホームページについて、「あなたは、学校の情報を得るためにホームページを今年度閲覧しましたか。」の肯定的な評価を75%以上を目指す。	○お便りだけでなく、電話連絡を密に取る。問題行為だけでなく、良いことも積極的に電話連絡する。 ○HPの更新の仕方を職員に周知するとともに、学校行事や教育活動の折に触れて、子供の様子が伝わるような記事を、全学年が月に1回更新できるように呼びかける。 ○保護者が閲覧したい時に閲覧できるようにQRコードをお便りに掲載する。